

## 「石山寺多宝塔柱絵の仏教美術上の意義」

林 温 (慶應義塾大学)

石山寺多宝塔は建久五年と読める墨書銘が発見されたことから、最古の木造多宝塔遺構として、またその優美な姿から国宝に指定されているが、堂内須弥壇上に安置される木造大日如来坐像、須弥壇を囲む四天柱に描かれた柱絵も、それぞれ創建当初のものとして別個に重要文化財に指定されている。

四天柱絵については、剥落損傷のために全貌を把握することが困難であるが、現在までに柱絵の尊像は五十四体あり、その内訳として金剛界五仏、四波羅蜜菩薩、五大明王、さらに剥落のために判然としないが十六大菩薩、四摂菩薩などが描かれていると推察し、全体で金剛界三十七尊を中心に構成しているとする見解がなされている。しかし、具体的な尊像構成、配置について考究されてはならず、仏教美術史の上で本柱絵がどのような意義を有するのかといった議論が不十分であった。

本発表は、柱絵を調査した結果を踏まえて、改めて各尊像について図像学的検討を行い、単なる尊名比定に止まるのではなく、柱絵全体の構想を復元的に考察する。そして、この過程で浮かび上がる五大明王の図像の特色についても指摘する。結論的に言えば、東密の伝統を引き継ぎながらも台密の影響をも強く受けており、比叡山の膝下でかつ園城寺にも程近いという、石山寺の地理上の位置を反映している。また、本柱絵の構想を成身会曼荼羅に五大明王と十二天を組み合わせた密教的空間として想定し、密教建築の歴史の上でどのような位置を占めるかについても検討する。

従来、石山寺多宝塔柱絵の図像構成については、建久年間当時石山寺で活躍していた文泉房朗澄が関与していただろうことが漠然と推測されてきたが、当時の石山寺をめぐる人脈や仏教界の状況といった背景についても詮索してみたい。

最後に、柱絵の美術的価値についても注目し、宅間勝賀との画風関連について私案を提示したい。